

演題番号：C7

濾胞性リンパ腫グレード3の犬の1例

○長谷見輔¹⁾，長谷生子¹⁾，中嶋朋美²⁾

¹⁾ はせ犬と猫の病院 ²⁾ IDEXX Laboratories

1. はじめに：犬の濾胞性リンパ腫 (FL) は、リンパ濾胞の胚中心が増殖するタイプであり、胚中心芽細胞の数に応じてグレード1から3に分類されている。グレード3は胚中心芽細胞が増加しており、びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫 (DLBCL) と同様の治療が推奨されている。ただ、犬のFLに関する情報は限られているため、確立された治療法は存在しない。今回、FLグレード3と診断した犬に対し治療をする機会を得たため、その治療内容について検討する。

2. 材料および方法：チワワ、去勢雄、7歳齢、体重5.3 kg (BCS4/5)、主訴：数日前に認めた体表リンパ節腫大。

3. 結果：体表リンパ節の細胞診検査では小から中型リンパ球を主体とした細胞構成が認められ、血液検査では顕著な小から中型リンパ球増多症を認めた。第3病日に左浅頸リンパ節の外科的切除による生検と骨髓検査を実施した。病理組織検査の結果、FLグレード3と診断された。骨髓検査では末梢血と同様のリンパ球の増加を認め、赤芽球系の軽度低形成も認めた。以上より、骨髓浸潤を伴うFLと診断した。その後リンパ節は縮小し、経過観察となった。経過観察中に末梢血リンパ球数の更なる増加と貧血の進行を認めた。第104病

日よりクロラムブシルとプレドニゾロンによる治療を開始した。リンパ節は更に縮小し、末梢血リンパ球数も減少したため完全奏効と判定した。また、貧血も改善した。第176病日にクロラムブシルの投与を終了し、第253病日にプレドニゾロンの投与も終了した。現在は完全寛解が維持されている。

4. 考察および結語：本症例では病理組織診断を根拠とすればDLBCLに準じた多剤併用化学療法が第1選択になることも考えられた。しかし実際には、経過観察中にリンパ節の縮小が認められたことからそれは選択しなかった。そして、進行性の顕著な末梢血リンパ球数の増加と貧血の進行が認められたため低悪性度リンパ腫に準じた化学療法を開始したところ奏功した。病理組織検査でFLグレード3と診断されても、組織像だけでDLBCLに移行しつつあるFLかどうかは判断できず、治療方針はその後の臨床的な進行状況や各時点での検査所見とを組み合わせ考慮していくべきと考えた